

2011年度 高等学院 学校評価(自己評価)

2011年度は次の各項目を重点目標として設定し、その他の教育活動も含めさらなる向上を図った。

1. 日常教育活動の充実整備
2. 中学部2年目の順調な運営
3. 2013年度カリキュラム改訂
4. 学部への充実した進路指導
5. 卒業生減員と学部割当数
6. SSH 継続指定
7. より開かれた学校へ
8. 大学新ビジョンにおける学院の役割
9. 第2期工事の具体化
10. 東日本大震災と今後の対応

以下、各目標についてその遂行状況を概観する。

1. 日常教育活動の充実整備

いうまでもなく学校において教科活動、教科外活動はもともと大切な教育活動である。教科の授業、教科関連の行事や諸活動にどの程度の成果が見られるかは、評価の大切なポイントとなる。同時に、学校が主体となる諸行事、生徒が中心に組み立てる生徒会活動、クラブ活動、プロジェクト活動など、教科以外の学校における活動は生徒の人格や社会性の育成に欠かせない。

2011年度は教科活動に関してはこれまでの経験に基づき、よりわかりやすい授業、より丁寧な指導の工夫がされるように求めてきた。また、1学年480人募集の2年目となるが、卒業生数600人時代とくらべて特に生徒の資質に目立った変化はみられない。むしろ教科外活動などの面で、若干消極的な生徒が増えている印象を持つ教員が多く、その点では、さまざまな活動に積極的に取り組んでいく機会を増やし、教科活動にも教科外活動にも「挑戦する心」を育てていくことが必要である。

2. 中学部 2 年目の順調な運営

クラス数が倍の 8 クラスになり、教員構成もいよいよほぼ完成年度に近づいてきた。これまで高校では経験してこなかった生徒指導、保護者との関係にも一定の安定感が出てきており、2012 年度の完成年度に向けてまずは順調な 2 年次となっている。行事などの 3 年間を一巡していないために、また高校との調整、建築工事との関係で、流れが十全でない面があるが、過渡的なこととして、なんとか乗り切ってきた。2012 年完成年度に向けてほぼ順調に運営されていると感じられる。

3. 2013 年度カリキュラム改訂

2013 年度に高等学校は新学習指導要領に基づいた授業構成となる。新しい教育課程での構想を準備してきた。具体的にまとまるのは 2012 年度に入ってからになるが、全体の方向性は、基礎的な力を含めてより広範な教養を身につけると同時に、高い専門性も発揮できるような教育課程で、かつ、表現力、プレゼンテーション能力などのコミュニケーションのスキルも身につけられるような工夫が必要ということが、徐々に理解されてきた。結果的には週合計の授業時間数増で対応していかなければならないが、新教育課程、学部からの要請などを勘案すると、その方向が現実的であろうと考えている。

4. 学部への充実した進路指導

組主任が個人面談を重ねるなど、概ね順調に推移しているが、一部の学部から依然としてミスマッチを指摘されることがあり、進路指導において、点数などの学力面、考え方、性格、志望などの面の両方でより適切な進路指導がなされるように努めた。組主任への情報提供、学部との懇切な話し合いの機会は有意義であった。

5. 卒業生減員と学部割当数

2010 年に中学部が開校し、高校の募集定員が減員したため、卒業生数が、2013 年 3 月より約 120 名減る予定である。その状況下で、各学部と懇談を続けながら、その意向をふまえると同時に割当数そのものの考え方について意見を交換して、今後のあり方を探ってきた。ほぼ決着の方向だが一部は 2012 年度に入ってから決着となる。

6. SSH 継続指定

平成 18 年度から 22 年度までの SSH 指定校期間が 2010 年度に終了し、2011 年度に再指定(平成 23 年度～平成 27 年度)を受けることになった。2010 年度は再指定を受けるために学校としてさまざまな工夫をした結果である。本年度は「初年度」として新たに取り組み始めた。研究課題は「未来を切り拓くことができる独創的な研究能力を持ち、国際社会で活躍する科学者・技術者を育成する教育プログラムの開発」である。この目標達成のために教科活動だけでなく、科学分野における国際交流などもさらに必要であることが痛感される。

7. より開かれた学校へ

生徒の視野を広めるために、国内他校だけでなく、海外、地域、企業、官公庁などいろいろなところとも連携することが大切である。たとえば、海外からの留学生受け入れ、海外からの生徒、教職員の学院訪問、学院生の海外留学、海外訪問など国際交流は大変重要な意義がある。これまでも PASCH プログラムや、個別の海外高校との提携などをおこなってきたが、本年はフランス外務省のコリブリプログラムに参加し、3 月には学院生が 2 名パリの学校に 3 週間留学することができた。そこでえる経験は、生徒の成長、と同時に、その生徒たちを取り巻く他の生徒へも、貴重な刺激となると思われる。地域社会との連携、その他学校外へと視野を広げることは、付属校ならではの工夫として、今年度も重視してきた。クラブ活動でも対外試合は大きな意味を持つ。これからも重層的にオープン化を展開していきたい。早稲田大学は門のない大学と呼ばれていた。学院も大学同様に、少なくともその精神においては、これからも、「門のない精神」を続けていきたい。

8. 大学新ビジョンにおける学院の役割

WASEDA NEXT 125 を発展させた形で、新たに新理事会が WASEDA VISION 150 を提起した。これを受けて高等学院が(附属系属を含む)早稲田全体の中でどのような役割を担うことが期待されているかという大きな文脈と、各学部・学院でそれぞれのリクルート戦略の中で高等学院をどのように捉え、その中に位置づけようとしているか、という具体的な点との両面で、さまざまな動きがあった一年だった。新規系属校も卒業生を送り出し始め、それぞれの個性を大学でどのように発揮させるか、初めていろいろな面が見えてきたこともあった。今後、全体と、各学部との両面で、さらに適切かつ良好な関係を築いていく必要がある。

9. 第2期工事の具体化

第2期工事の前半(解体部分)が着手された。今後具体的に、教室棟、講堂棟、体育館棟の詳細が詰められるが、適切におこなわれるようこれからも細心の注意を払う必要がある。

10. 東日本大震災と今後の対応

2011年度は東日本大震災の影響を受け続けた年といっても過言ではない。クラブ活動も春夏を通して今までと違った連絡体制や練習体制をとり、より安全・安心に注意を払うようになった。また緊急時に備えての対応を一段と準備が進んだが、備蓄品や緊急時マニュアルの準備など、一部今後速やかに整えていかねばならないことも数多く残されており、課題となっている。

以上